大和物語　下

阿波國文庫

宇多帝也 寛平法皇

亭子院のみかとおりゐ給ひけるとし
秋ゝ弘徽殿のかへに伊勢の御のかきつけ侍
りける

わかるれとあひもをしまぬもゝしきを
みさらん事のなにかかなしき
みかと御らんしてそのかたはらに
かきつけさせ給ひける
身ひとつにあらぬはかりをおしなへて
ゆきめくりてもなとかみさらん
これなんありける

みかとおりゐ給ふて又のとしの秋御くしおろし
給て所ゝ山ふみし給ひておこなひ給ひけり
備前のせうにてたちはなのよしとしといひける
人内におはしましける時殿上にさふらひけれ
くしおろし給けれはやかて御ともにかしらおろしてけり人にもしられ
給はてしのひつゝありき給
ひける御ともにこれなむおくれたてまつらてさふらひ
けるかゝる御ありきし給ふいとあしき事なり
とて内より少将中将これかれさふらへとてた
てまつれ給けれとたかひつゝありき給ふを

の国にいたり給ひて日ねといふ所におはします夜
ありいと心ほそうかすかにておはします事
とおもひつゝいとかなしかりけりさて日ねといふ事を
うたによめとおほせことありけれはこの
よしとし大とこ

ふるさとのたひねの夢にみえつるは
うらみやすらんまたととはねは

とありけるにみな人なきてえよますなりにけり
その名をなん寛蓮大徳といひてのちまて
さふらひける

故源大納言宰相におはしける時京極の宮す
所亭子の院の御賀つかうまつり給ふとてかゝ
ることなんせんと思ふさゝけものひとえた二え
たせさせて給へときこえ給ひけれはひけこ
あまたせさせ給ひてとしこにいろ／＼にそめさ
せ給ひけりしきものゝくとりものともをりそ
めかりくすたれにしてたはけくせさせ給ひ
けりかくてなんあまたそめてたてまつりける
なりうの地もと九月つこもりになりにけれは
てくるりそてらの十月つゐたちの日このいろ／＼そ
め給ひける人のもとにとをそおくりける

ちゝの色にいそきし秋はすきにけり
いまはしくれに何をそめまし
これはかのうせ給ひてのちにしくれてかくなんありけるなか
れたりともいかゝ給ひけるとそれよりのちはうたの
ころやみなりきんせうそくもいかなくしもその
院ことゝりにおはしまされて
かなけのかねしやのまゝにしるあみたれ
さりくともゑのこたりひそふきつゝ
ともいつけとらるもそしてせくとうこそは
なりてこゝろくるなりに御のもをしみ地もり

宰ふおつくれん沙家にかへりまうでて
わかやとのいまはとふらくめつらしなかなら
ぬひしをこそたのむいてましを
とそよめりけるをいといたくあはれかりて
てなんありける
野大貳すみともかさはきの時うての使にさ
されて少将にてくたりけるにおほやけにも
つかうまつる四位にもなるへきとしにあたりけれは
月のかゝいたまはりのこといとゆかしうおもひけれと
京よりくたる人もをさをさきこえすある人
にとへは四位になりたりといふある人はさ
もあらすといふさたかなることきかむと
思ふほとに京のたよりあるにあふみの守公忠の
君のふみをなんもてきたるいとゆかしううれしう
てあけてみれはよろつのことゝもかきもて
いきて月日かきておくのかたにかくなん
玉くしけ二とせあはぬ君か身を
あけなからやはあらんと思ひし
これをみてなんかきりなくよろこひける
使にてかうふりたまはりけるなりけり

なんありける

前坊乃君うせ給ひにけれは大輔かきりなく
志くのみおもひいりてゐたりけるに后の宮后に立給日に
なりにけれはゆゝしとてかくしけれはされは
よみていたしける

わひぬれはいまはとものを思へとも
こゝろにゝぬはなみたなりけり

あさたゝの中将人のめにてありける人に志の
ひてあひわたりけるを女もおもひかはしてすみ
けるかゝるほとにかのおとこ人の国のかみになりて下
りけれはこれもかれもいとあはれと思ひけり
さてよみてやりける

たくへやるなかなしねといかにして
らるかはかりはてにけるかな

となんありける男女あひ志
りてとしへけるをいさゝかなることによりて
はなれにけれとあかくしもあらてなほしけれ
まやありけん男も女も思かけりくなんいひける
あはれいまもこひしと思へとも
しかしあひもの ゆゑゆりける

女いとあはれと思ひけり
監の命婦のもとに中務宮おはしましかよひ
けるを方のふたかれはこよひはえなんまうて
こぬとのたまへりけれはその御返事に
あふことのかたはさのみそふたからん
ひとよめくりの君となれゝは
とありけれは方ふたかりたりけれとおはしまして
なんおほとのこもりけるかくてまたこともなくて
もとめはさりけるをそのゝち院よりすまゐらん
久しくせうそこなともものせさりけれはいふなりけり

はかなく思ひけんよみてつかはしける御返し
大かたのいつはりなくさめたにあらは
何ゆゑそんさのはかなしと
となんしいはれけるやかてかくてなん人々もゝ
そのゝ兵部卿のみやうせ給ひて九月
はてをつこもりにし給ひけるにとしこかの宮の
のうへにたてまつりける
大かたの秋のはてたにかなしきに
けふはいかてか君くらすらん
かへりことかくしもあらしと思ひてかなしうなん侍りける

よくてやみにけれは
おしかへしあまこてつなきけりしに
さてはあまてこゝろをかしきの
と男なん返しいひける
塩の家婦はしまほとりなる家に入まいりて
わかあるしこゝに宿りしけるまての家の戸
へたてゝたちよりしかは
あるところには侍りてもてなさる
めしよせありけるにいてかへり
須磨の浦の宿にあまのしほたれぬる袖

東の方とて思ひくまなくて侍けるを亭
主はのゝぬしそてつけて侍つへし人
まちりみちもいとあはれにうちたれて
かんとも侍ひけるさしてよまて歌よみける
ところれはよそにおもしろくて
こゝろ○めかの有ける字
とはもれは遠し
こひしくはたすけて○とはすまの江に
まつやうらむひとはいひつかん
となん侍りける

おなしをとこかのうらに文とえてよりける返ことみなと
のわかきをたまはり返りけれはあはしのひてよ
みくかしもひさしけるかへすく
わくしの人しれぬ心すきたまへるのよの
ゆきしやまたゆきのつもるらん
しはしのせう藤原のちかぬといふ人のめなんとしこ
といふ人なんありける子ともあまたいてきて住
きりけるかほとなくなりにけれはいみしくかなし
くのみ思ひありくほとに内の蔵人にてありける
一条の君といひける人はとしこをいとよくしれ

つねなる人かくなりにける程にしもこはさ
りけれはあやしと思ひありく程にこの人の
もとの女なんあひしりけるとてつかはせん
おりしもやはれにし人のめなしくみて
云きへ住しをいかなるまめとこ
とゆるしはしひかれはなし
かの人もとまりしほとにはなけかしく
おほくしろの人かくしなみて
本院の小中の君といひしは君とおほい
御めのとのいへるをうりけり陽成院のみこにか

たてまつりたりけるをおりて風さうのうちにをとこ
てあそびまつり給ひ
わすられしおもひとさへおもはさりける
いけのなかもみえるへりけり
又作り夜の宴にまいりてこれをこひけるにとよし
たりけるに又て詠しみけれはよみてたまふ
数あそ又所よとくしひのさてたまいは
ひとりみてさへ物まそけりける
とよみて奉りたれしみ給ふてあるなれしたの
たゝの本まつやまなんのあはひける

陽成院のすけのこ御ちかわかねのりに
よみてつけるおもしもわされ尊
かつらとこゆかもへまそありける
かわせし
よみてまかりしまとやまされ尊
はるかなのたゝしみされと
敏我卿くいえのあはれにかへるらんなむとまとけ
とられて源女とさまよふとはけて風り
たりもまてかね
頼風まうひくかえあいけりかん

たなゝはにかしを恋しりけるは
あはれのこと也し
たえしとも志れしものを松風と
うらみてかはるかなりけれとし
故式部卿の宮二條の御息所にたえ給て又の
としの正月のなぬかの日わかなたてまつり給ふとて
ふるさととあれにしやとの草の葉も
君かためとそまつはつみける
とありけり
おなし人中将のみこにたえてひさしくおはし
ゆきかよひけれはなりけれはなかれたりけり
世のつねにこひしきをあはれのなかれは
そのへきそのかくしこそやすらめ
とありけれはかへし
ゆく末は神無月
しれもきくれしとしころのせり
とよみたりけるにいてあはれにおもひてそ給ける
故式部卿の宮の御むすめのみこにさふらひ給ひける
ましてむかしをこひける時の月のいとおもしろかりける
のちのあはれにたえそこなひけるに

久かたのそらなる月のかけならは
ゆくともみえて君しみてまし
となんいひける

良少将兵衛佐なりけるころ監の命婦なんすみける
女のもとより
かしは木のもりのしたくさおいぬとも
身をいたつらになさすもあらなん
返し
かしは木のもりのしたくさおいのよに
かゝる思ひはあらしとそ思ふ

となんいひける

良少将たちのをにすへきかはをもとめけれは監
命婦なんわかもとにありといひてひさしくいて
こさりけれは
あた人のたのめわたりしそめ河の
色のふかさをみてやゝみなん
といへりけれは監命婦めてゝくれてけれ
めて侍りけり

陽成院の二のみこ後蔭の中将のむすめに
としころすみ給ひけるを女五のみことえたてまつり給て

のちのちまで心ゆくはかりなれと今はかへりなむと
ちかくなりぬと思ひたてはくるしきまてなくなく
まかりいてしかはさて思ひもあはれなりけれは
したりもあれはえ御ともせすしてとまりてのちにかい
つかまつりたりしかくみこあしたにまうてこしの
ことをなんとく仰せられてまかりしはかなくなりける
おほえたてまつりてなんなき
ほとなりにしかはえかくのことく山里の
なれしのみもとこそのこともあはれなれは
先帝の御ときに太政大臣の女御なりし人の御局

にまゐれりしかくてありしかはいとはかなくかなしけれはいかなる
よにもとてかくもとおもふ心はひけるにおもひ侍りつるをと
まてし

日くらしに霧たつ山のかけにきて
こころくるしきあそひしたりしかな
とよんてしかなり
おほえぬ山の念仏にいりて律師の山にまうりにてかく
日も法師のこそそてあらくけるいかてかくのことくや
ことにおもひつむろの松のはかにまことにあはれに
めしおきけりやとふかくそおもはれし

世をうらみけることありてすなは
ちにもとりてかのしらにこもりたりけるかあみて
しはすはかりになりけれはしはすくいのしこうせさせて
まつり
桂のみこのみそきしたまふかあつまりて人々あひかたらひ
つとめてそのとのへまゐりてもとのことくにはへりける
そまてことつてこれよしてたてまつりけることを
みこしかつひそかへつたへまつりけり
とかんありきけれは
かくしつゝ人法師まゐりてしもにちかくさふらひけれは
ちかきよしかは人へみつりきこしおやのことくに
あはれとおほしけりとせさせたまひけるといふかおは
つはかきたんひつりておやのよみけるのつこ
ともきこえて法師になりたりけるへかくなむ
ちつきものゝふかいひおくれたりけるそやりける
いまは我いつちゆかまし山にてくし
よのうきことはなほもたえぬか
なすへき人のちの無為依をたゝる年の秋
家にこれまてあつまりてもひとつことのみこと
といひしたしきあはれなる御事ともなりしと

とおかしきをこひかりわさかへけるさきりたちて
たれかりきりゆらしと
わさうりの中ニこゝみさしたしてかくらい
よ向くまふくうましかくまし
とひかりかいせうかし
こゝのつかきまれねをわくかん秋こそあれ
まつされはさんしぬさみとおもしらん
まらうとハ貫之友則なとになんありける
敏行の人文上三系のたれかしくとて上達部なとも
あはして参りゆくこうちは所をひかえし給く

太宰の君いふわさをひ給へ給ひけりしかつきを
地みくもへ此女郎出とへし給ひて大の殿く
とさえつおもてすりうる志て給て
むかしのふりけりわくのをふくうる
よるんありまうらく人のおほかれとふよらぬ
しらされけり
故ゝ家のゝ宗于の君なりける人ニ身ハ經て鍛身の
ええうけいてぬるゝ思給ひふはらうかりいふ高ニよ
内門に紀伊守より石つきうつらふくをえんなき
つとりけるを趣をそ人とあらとけるに太家の

うこ

たゝ津風こけのむしろに立寄れ
みこりさへやられしゝはせん
むかし右京のかみゝ陸奥の今ね
よそみつ見しりしを友の民の
みなくぬ嘉そこうれりもなる
亭子のみかと右京のかみみてたてまつり
たり給

わかきてふ人をゆる人給しきぬ
世またにそ御色りもまし

文

しれのさふ豆皇の手のした
ところひとしやとりをきぬらん
とわりられは御りみ給のぬひとなりゝ陸門
かはんして何事をこれを御ぬまくとさ津の
表はるん御を給けるときこしりいりむもくまん何
見しと給りゝ給ける
とり給ゝ院よりこてたまへつりける
立るん平のとしも申のはゝ人のかい
とのいのおほくまわさをそうかしき

う京のこのもとなる女
いろこきおもひしとそこの花を
　こゝろにはけつゝおもひいてなん
堤の中納言内の御使にて大内山に院のみかとお
はしましけるにまゐり給へりものゝ心ほそけにておはし
ましけれは高き所なれは雲は下よりい
とおほく立のほるやうにみえけれはよみける
白雲のこゝのへにたつみねなれは
大うち山といふにそありける
伊勢の御におなし歌文のかはりしもしける時
堤の中納言勅使にてくたり給ふ
くれ竹のよゝのみやこときくからに
きみはちとせのうたかひもなし
かへしはさいくうのす歌なれはおほしまはにあた
れ文とをきんいひける
たりけるかつひとりは殿上して我はえを
りけるかはまよひくりける
くさきの花をもてあそひちらくさうに
なかしまとやいひへりける
先帝の人のみこのみむすめは一条の君となく

京極の息所の御ほとにたゝしのひとつの御そ
わか車けりて御とものひとのかゝみのうちに
そこのところをとりて
たまのうてなにふへこのむ
みちのくにのかけろうにあけゝれはたゝよ
伊勢のうちしあふらんにとうつりてかうおなす
おほえしわたりをさりける御しもとりもうる
まいとしたん京のとしいてゝこそひくわと
にて（て）とこそありける
とて露のひとつをまこと（ゝ）ぬるさるかと

みなとそ申くわへりけり
桂のみこに式部卿の宮すみ給ひける時その宮にさ
ふらひけるうなゐなんこの男宮をいとめてた
しと思ひかけたてまつりたりけるをもえしり給はさ
りけりほたるのとひありきけるをかれとらへてとこの
わらはにのたまはせけれはかさみの袖にほたるを
とらへてつゝみて御らんせさすとてきこえさせける
つゝめともかくれぬ物は夏むしの
身よりあまれる思ひなりけり
源大納言君のたゝふさのぬしの御

ゑりそうしてとむらひをわりまゐらせし人
かくて法体の事とはおもひなから法皇も
つれつれとつく日にもれたまふはしこと文にも
あはれなるありさまにいひておはしませ母よ
もそんをおりしかりそり文これかゝるをよ
ふしいふ事人おりまゐりそれし物の哀あり
てつゝむなりし入人みりけりこと也人はと
ひくる法体の批判し世中のうらみす
せきんの表なるいひくろのかゝる御なる
いひはしと世にいらるゝとのうしるんすりい

わすれといゝく君よみて御
ともうく後生はいたましく色しらせくあ
つまくらくとおんみにまいらせしかりけるを
のちもみたてありもれ
ありうしと又法師のわか人の口入さつくて
ぬりもうかりしとく世中よい事ありもを
まてしなりいりきる
さしてい西山よいさらりそてすれ
そしまうるゝのみとうやわりきん
とりんまいけ又この人の心りしまうるたりける

わさかしことは月は庭の志てなり
侍とて猿まくら給ともん
此女房に志ありの中へまゐりともとさん
せさをはらのもとよりおこせけける
ゆまを給ひてのたくのをさとの
わすれしかけしみをや世中
すまひくとをすくむしふとして山にへありとを
こそひとくいみをりかへくいはくふかゆんにて
ふる山にこもり給ひぬわれしは庭てそ
しるひやり給ひさりさにし

おふくりふくもわくとよめつ猿の
ひえをとゝやすみかりけり
ともんひとりとよりこはれむとかりかり
たかしへにおほく山への御給へる月はなし
ともくやかるいつりとまれて
のかり給く山の雲井にとまれて
日をふるくなるものをかそかりける
ともひとこまりなかくのこよりかね
のおはりへにいてとまれし
のうちをたまはりきさうんかまゐ衣

かくてこうしをはんかうまりい
修理の中納言の君はこれみこの御息所
と申しけりけるにかふ名をいつかうし
めずらんずるくもこととおぼしけるに給りまく
御門にまてたてまつり給ふ
人のおやのいとやむごとなき給ふを
みとこふうちに申しひめうれ
先帝いとあはれがりたまひたりける人
しいありきけれど人えしらせ
承香殿のことたてなりかへてありける

思ひりては住いひとをせうる
うちとけて君し給はんときりを
露のいとうれてこひもあつしれ
かなし
これなんなりてたまてといひつりん
まれしてうおもしとの住の給まく
陽成院の一条の君
おきふしやこひうたちふ給ふい
ふくるもうちの名をとこ由や
先帝の御時前坊の君とてさぶらひ給ひを

ろ更衣はそらも曇りいて袖ひく袖をしほり
えり縫ひさりかるるに深くつきもの
大ひろくところをは月の新ふれや
まそくしてのちけるらん
ねすみとて東院のみこのはまたに菊に宿をで
ゆかすてこそ人のたちかへしてもとい
たれかとはまいらするやうのこふく
新院のかへし
ころもやとよりあれりともよる君すくみ
まそてやさくれ菊くさみまやしや

こいせん山上のかへく
雲かとてこころは紙上かかるもの
うき世をさしてこの身なりけり
東院より内上
ためしえとわきてしもそ桜かれて
ひらくも深くをおもかゆるかな
れかへし
花の文とみててもみるみん神さてれ
心ゆくてるとくしくとそ云々
これも内のか

ここにはなのみえんにはとそかたる
うたかたのあはれめのとものこそありけれ
陽成院よりありける坂上ことにおほせて大嘗會
院よりけるせさらの事をきてはいさりまいらせれは
秋のことよくもんしてまゐらすや
しけるなさりに梓ととしきこゆらん
大京のことも梓ゆきの末こらしはあさなき人
こくやしとておやことをもろこしのかとはくまれを
ましあらのしんてえゆんとく人の出へいつみ
けるさてありしまゐらせしをたちのもとへまいりてこ

騎くりきり
志かりしてゆくきひあまてとりとあれ
いのちしらし梓くかへりしとせし
おとこのきりかく思ひのせとなきはく人のを
みへつきりいはれしのみなもちをさまにしてこえと
いひてこゝりそれて
いまこんといひくまなれし人かれて
つこゝりとこえもみなせにてまもつるか
とよんいはまへ
越前権守兼盛ありけるかへさいみとかへ人を給

かくてのちは文もかよはさりけれは
　夕されはおもひそかねつわひしさ
　をもとめしこの世はかくてやみぬる
女返し
　この世にはかくてもやみぬわかれちの
　ふちせをたれにとひてわたらむ
近江介平中興かむすめをいといたうかしつきけるを
かくておやなくなりてのちとかくはふれて人
の国にはかなき所にすみけるをあはれかり
て[illegible]とふらひけれは

とちこちのひとあまれりける山里よ
家あるしいたういやかりて君
[illegible]みてよそをて
くらそおもひける女をいとあはれかりけり
なかしり給ひけり太政の大臣閑院の三のみ
この女にありける人浄蔵大徳にものいひけるを
[illegible]のかたちよりとりきりてとまりける
　すみそめのくらまの山にいる人は
　たとるたとるもかへりきなゝむ
とひけりかくてそのむすめとえんといひ

まかれしおやまとにいとちかくなんおはしけれは人々か
らしかりきといひけれは京にゆくとて山ふきの
まつけく

花さかりすきてやおもしかはつなく
井ての山ふきうしろめたしも

といひおくりてみそかにかへしとすへきと付給
うつる君のおもふこりけるに見えすんなほさかの
おもしろかりけれは

大そらの雲のうへにはさらてなる
ともののしゆきはあとかへしもなし

となりけりとうたかひゐたりの大空かはかゝるなと
さかりまのことはおもやたなきりせん
みなもとのとりのちゝかたよさふ
まつかうけりてけんかたりとかしく歌
さく京上のほりたりけれはうちに給り内
かりそのし給ふとつけたりきてよひさ
つゐされし井ての山吹しろかりしといひを
乱つくとられなんうちの女のはらてとくり
よりたれは歌

年をへてかはらすりつる衣はと

きのふの夜はくらやしあらん
とよみたり
世中をうんしてほかへいきける人女の許に
よみてやりける
うきものといひてこころはいつしかを
うさをこのわれしのふへきもの
五条の御といふ人ありけり男のもとにわかか
たをゑにかきて女のもえたるかたをかきてけ
ふりをいとおほくくゆらせてなんかきたりける
君を思ひなまなまし身をやくとては

きふりかゝるをみなまさりける
亭子院に御息所たちあまたみさうし
してすみ給ふに年ころありて河原院のいとおもし
ろくつくられたりけるに京極の御息所ひと所
の御さうしをのみしてわたらせ給ひにけり春
のことなりけりとまり給へる御さうしとも
思ひのほかにさうさうしき事をなけきけり殿上
人なとかよひまいりて藤の花いとおもしろ
きをこれまさりけるとまりたまへるみやすむ所にたひ
てみありくにこのみつほねをみいれけれは

き夜あけゝるまても
世中はあはれなる事のみおほかりけれと
このよのうちの花をこそみまし
とありけれは人々みなあはれかりけり
れり給ひけれとかくさせたまはれしてまつりては
えしらすなりけりとてなんいひける
萩の花いろのあさきをみゆるか
うつろひてもみなあはれなるへし
のちさむの我ことといひける人浄蔵といひしは
う思ひける世中あはれなりとかく楽て思
かくとをいひつかはしけるのちさんのきと
思ふてぬるとしはかりなると
ひとれ人々何といはまん
とひとときてありもれし志やすさう大となゝし
柱くもしのすゝせとしつあんけい
こゝみつかさりの男とそいひける
故右京のかみの人のむすめとしのひてえにけり
かくおやきかすけてのちしりてあはせける
またひとへつまなりさて朔日よりて申けり
さまにうれしく侍のあはしといひけるを

さひきしゑてとうしてそう
平中ハくちをしと思ひける女とものあはれそ
きてとさきりけりけれはたゝかたをとひく
めつかきといふかしきりはかしきてふたやうきん
らうたしと思ひけれとあすいちうやく云
なれいちくたりしえうて皇人の御まへにはよ
つかうりてたてりくともある世中のこゝろ
かしあはれをせうはもの御かとをとらせ
うそうし給へとのたまはらんとてはへり
はせつゝ地うつゝて車なりて庭りく

もかしとありいとあはれとおもひけりさて女ハ
かりこつりけりとてあまになりにけれは
わもとも恋しやとあるをよみて
もとこゝろわすれかくしちりつゝゆし
南院の今君もとのちるまてありけり歌書
右京のかみむねゆきのきみのむすめなりこしと
ひきいれしかは御息所のきさいの宮へまいり参りし
とひとをそりきれし
あなたになりしとつゝいけるしも
けとみもしとつりけり

とりて宮り文

たけえのときけかへる山の嶋
千くまねても孫とのことなく
すさびもりくく寿りもろとやいろりぬ
む御う念もれく
　え〇とくやうりとあへもいやくし御
　いとふ為うくこさうらうすき
なし孫しゅりあれとえ為千文宮の子御
成こうりけるかぬ地しいとく成よけめくり
孫孫とひふれたしくりもろかはとさして

ありさりもせねく
　ふまとしさい宮ふうのこ我と孫とや
さへ代ともありけれくてとしし
しまんいひくかうりけつくあしちも御よ
こいひねされしいとしとせりし尤ひくのたさく
みまてもかそとおなのいとわきとみりしうや
もん流しうや
ゆしこちねと折けつ成こうりもれい
さうかまくいふみをゐるのおとえけ
きつとうたくもしとあひけれうか

みしこ雨のふりける夜ねむらてよもすから雨し
やさかりきんこゑもきこえかれさる家そ侍
といくそりなりわたりのいくふりしいえり
いてをなりまにさる所まくいへとの侍へる
といつりまれいとしく
えとるりいもりのさやと思へるを
こしひのはちいとしぬもとられ侍
枇杷殿とうふしこる家にかしこる本のほけると
なりに侍つりまりかるせくのうゑけたまりける
ふるやとといつしえのなきしきの

さしかゝりいたりにとこえする
はるし
しみ東にまくりのへとのむしけると
ふへてそおりしたりおさかる
たちかりれくおのお軍にありてくたりける
はうれかしもあわりける人と堅み縁出いる
わひるてひかりけるのかわけるちかりく
まおのりまぬうしをおさかやりたりなかの
えてるおとと
ふいくまるしさまさかり衣

こゝろはくし心地なむありける
ともかくれと女うてくすになり
わすし人を堅気山りとやりたりけれと
なりくのあはちの山もと経とまり
こゝろられのまし　かくしと
ともんいひけるそ経とゝたる家ゐまうけ
さてあるとうんとりてやりける
かも川の瀬に身をなけていとよりく
経くまそあはせ茎まみてしや
くてこの男ちの血へくまりけりたとりまつ

きゝくわしまゐ行ふことゝもとさそもあまと
たゝかくやむひしてなん志かるかわゝあはれなん
思ふ給くまて内に志のりゝのひまに庭ふ
あとりたとりまてけく義なるつしてそと
うきつゝ文とあんをてまりけりいとあなし
くてそしといはゆうとひかれく侍ひのひさ
しくまりてゆくまてゆきあんまけるとんか
志のいゝのしよやくとうちゝまし
かくはしくなりそしに出へ侍
とりてまんみえける

ちくさはかく殿上して大七とこいひきろさうふ
まうてくへ所よわりて孫の使けてお
やれもしこいぞさみんかりける
故式部卿宮うせ給ひける時いさいさの比にて
みな花の盛なりけるに中納言兼輔
給ひける
ほりかはのおほいまうちきみの山さと
ひとのせよりは久しかりけり
三条のおほいまうちきみの
ちる花もちることを惜しむ

ほりかはのおほいまうちきみ
たまへる文かく御ほうし時京子院にまうて給
ひけりこの文のかへしをきこえさせけるほとし
おほせの給ひけれは給ひけるを給ひくれなと
院とてあはれなり池のかはらも給
こそはかなれなりたれてあるる
いまもきこしめしけるみゆる
かくてしたまへるそかなしと
ひとの世のこのかへりけるをこひしきを
ゆくての中納言して給はりけり

こゝろあれなといひやりける
わか人のまへにさくらをとひ侍りけるに
もろともに人もなけかはかゝる
とありけれともひさしになり
おなし中納言の殿のしんてんのまへにうゑし
とくたてまつりける桜をかりて人給ひける枝
にさしてみせけれは
やとちかくうつしてうゑしかひもなく
まちとほにのみにほふ花かな
とありて侍ける

おなし中納言殿人のかくれ侍りける人のかへかへの
うちふくからけるまへりけるをけるに中納言
宗于としのひて山寺にまかりて
ゆきのふりしくをみてよめる
とよみておこせ侍る
桂のみこのはゝもふりしたまひてはへりけると
母の息所にてつけ侍りけるをきゝて侍れは
みひとよ立まちひとへかなしくかなし
侍へくかなしさはかりなのひつれまる
こゝろひとつかなしみのはなのちる

なほそのつらさ思ひしたてまつりしや
これをたまはりしかとこたまはりけるに
あかき座成あらしのうこゝもかわ
まゐりけるもたちやのかわぬ
かく志のひくあらはまゐるもきゝ院に八月
十八日まゐりしほとまつり給ふとあはれは参り
あふさかへいあはれおもしろくさふらひぬ
あさけりもとあさりさまてうかれ
しえこまゐりてはうさまゐりはしける
たりこめりいふまゝあつこうやまん

このみは宗にてそもしもつ
藍命婦相模の蔵人まつくあかりもろ
と評辞のみとほしてゆるしをはひきそう
ありけりの文ありけるの筆
うちはけたまふけいふてきこえしに
おくさかやそくたもかわりなる
みこの宮はいふこともんにまゐりしめの
まこたるしかとこたなし
こりとゝめてまつるをうたみち
たまきさかしありけるなむ

宇多院の花おもしろかりけるころ南院の君達
これかれあつまりて歌よみなとしけり
右京のかみ宗于
きてみれと心もゆかすふるさとの
むかしなからの花はちれとも
しる人もありけらし
季縄の少将のむすめ右近故きさいの宮にさ
ふらひけるころ故権中納言の君おはしける
たのめ給ふことなとありけり宮をまかてて
さとにありけるにさらにとひ給はさりけり
内わたりの人きたりけるにいかにそまいり
たまふやととひけれはつねにさふらひ給
ふといひけれは御ふみたてまつりける
忘れしとたのめし人はありときく
いひしことのはいつちいにけん
となんありける
おなし女のもとにさらにおとつれもせて
きしをなむおこせたまへりける返ことに
くりこまの山にあさたつきしよりも
かりにはあはしと思ひしものを

とよみたりけり

むかし女のをやしらせてすみける時にかか
しひ給へるかりなりけるに物もかはぬ
こはりもりあひのやうにしてきのをとこの
ほとにさたりたまへりけるをみてゆめのうち
なれはむかしのことをかたらひて
あり人あひくらへなりける
ときりのことをこひたまへる
とよみかきて文のはしにかきつけてたまへる
まかり

むかし女のもとに文やりけるにとをき
てらのひとまれにきてすみけれはとひにやりける
おとこまつたえて身をはうらみていひて
人のいふをきかてはおもひかたかか

むかしえこうと

むかしたまさかに宇和のたかさきより
ひとのおもひまゐりけれはそこなりけるかの
かたりたまひてなむありける
うちの人のわたりのひとのいひさためたるは
むかしこれとそれとの後やまみ

となんありける

むかし男のはらからは大納言成けるかむまこなりけり

さりけるに物すさましくおもひて絵に斎

とあと思ひまてしらかのうくりけり

なふまりて萩のやまもかさねて

ちゝみつしふかくたまてとさそひん

とゝてたりもれいふかくめて給へてこそ

ゝことうつしてひとえにもし思へ

かく絵やりてやうなる涙まし

となんよみたりける

たしまの国にかよひける兵衛のかみなりけるかこ

のみむまやりけるをとこにて京へのぼりまかりて

宮のうちにけるにいひをこせたりける

山里にすまひとありて心あれちの

ゆきのまふかくふかくなりなん

といひやりければ返し

山里にかよふ心もたえぬべし

ゆくもとまるも心ぼそさに

となん人へしりけるん

むかしおとこ紀伊守なりける人のむすめ

こゑとりてかへりきぬれは女
これかれのひとのかりにゆく人
風のさむさをおもひしるまし
にし

このむかしひとのかりにゆきさかる
しふたりのかきそへかなしく人
修理乃志もとのとけかりける河方かよる
かりなれしとつるかへ海なりてかん之来
ましあるいつりなれて
こなのあつことをかきたりなれし

うしろんてすれとひしき
かくしまのいはほをりはかなくてしと
せられける
いてまゐらすあしたのかふしよろん
なかありてきよまらとこゝろ
とかりなれにし
わかれかれかふいひあはる袖か
こつきれ宮路の人へさへし
文たかし女まうしひもつ時つとそてらまきり ねか
なきあしくいうまてそすすかさの

きりたちぬることを人にきかするか
かくこそいはしむしりけれ
いかにせん我しきてなん申縁の
くりてのちの物ならし
なし
かくかな御かさみのあさはてゝなる
くりてのちをのやかりふと
むすめ女王をちらく物すらひとくかへり給
かよひてやりける
こゝろをし忘れぬもてなしけれ

物かふしうの気をやめさせん
御経のなし
たまはりけるにはかにことをかんかへ
まろ給ものゝことしりてありける
なをし女王殷無の御文は世にしらずこ給ひ
くりかへしまさりしぬ給ひなれはさらにあら
たのことを御はしかきくれ給の
ひとよふてつめおくのふたとせ
三条右大臣の御中納言よりあかり阿家
の使にされていそたちに給せるうひ給け

に女のたえて久しく成けるにかゝること
なんいてたつあふきもたるへかりけるをさはかしう
てなんわすれにけるひとつたまへと
いひやり給へりけりよしある女なれは
よくてをこせてんと思ひ給ひけるに色なと
もいときよらなるあふきの香なともいとかうはし
うてをこせたりひきかへしたるうらの
はしのかたにかきたりける

ゆゝしとていむともいまはかひもあらし
うきをはこれにおもひよせてん

とあるをみていとあはれとおほしてかへし

ゆゝしとていみけるものをわかために
なしといはぬはたかつらきなり

故權中納言左のおほいまうちきみを
よはひ給ひける年のしはすのつこもりに

もの思ふと月日のゆくもしらぬまに
ことしはけふにはてぬとかきく

となんありける又文やるに

いかにしてかく思ふてふことをたに
ひとつてならて君にかたらん

かくいひくてはわさあひけりなを
まうてくれさしもや思へとも
たえぬはひとへに給ふなりけり
先とおほし中納言斎宮のみことしころよはひた
てまつり給てけふあすあひなんとしける程に
伊勢の斎宮の御うらにあひ給ひにけりいふかひ
なくくちをしとおとこ思ひ給てなりさへ
よみて奉り給ひける
伊勢のうみのちひろのはまにひろふとも
いまはかひなくおもほゆるかな

とよん給へりけるを
故中務宮の北方うせ給ひてのちちいさき君た
ちをひきくして三条右大臣殿にすみ給ひけ
り御いみなとすくしてはつゐにひとりはすく
し給ふましかりけれはかのきたの方の御おとうと九
の君をやかてえ給はんとおほしけるをなにかは
さもとおやはらからおほしたりけるにいか
ありけん左兵衛督の君侍従にものし給
けるほとのその御ふみもてくやせんさいつ給へりけるさ
てんにみなしてやかていらんとしてその文ありけん

ゆり給ふまうちの時に関白殿のいたまより
おほえ人のもとよりたよりを通はし
いまひとり人に名ふのあかしき
文の御返し
とこよりも思ふつゝとしじまを
ひかりかへてもみしもそをけ
とかくんありけるに
おなし右のおほいとのゝやと宿みやす
まうとみりての式部て文かんとえて
思つり給ひなほとゆくありきんれつまうく

まけの源宰相の御もしとよりは文たまわり
給つりも御まらやらむ不らやのたらしまお
しらおかぬし給ふてれゝに
志ら山よふりし雪のおくらして
いまいうしらの人てかへれ
とられてける御返わまし知にかしとかりく
てれの君の給はの君にわつきまり給て名り
ちかしころの関白にと文おくらん思ひこれありり
名れは左のれうの右衛門督にたちまちか御文
奉り給ひかへの君しこられ給ひあとらえ給

ゆくすゑもやすむかし
雲のうへはさもあらはあれよの
うきやまともをかけゆかむ
おほかたにしられぬ心のうちをなくさめてその月
まかりてかへるさのみちにいてたちける月の
おりしもかくれなかりしかはいてゆきてものゝ
ゆゑあはれにおほえけるまゝにかけ侍ける
くもゐにしはしやすらひて月を
かけみるひともみえすなりにけり
おほしめしかさねたるたのもしきものゝいまはなきとかや

ら宮にくれ給はせりけるにひとり雲のうへに侍ける比
子のたんせうふん中宮の御そうしのもとに参りて文
ゆかされ給けるうちにそれはなにとなくまかりて
まとはるゝ○みこゝろのうちにいみしく宣旨
参り給ひて院の御せうそこのいとあはれに
侍りてつくしゆかされ侍しかは中え給ひさく
よろこひ給ける
ねくそのこゝろしも思ひしみける人の
ことなれ文はみなことしもありけり
とそなんおほえ給ふ大納言のかたの中将にて宣ん

抱し給へる

亭子のみかとの御ともにおほきおとゝ大井に
つかうまつり給へるにもみちをくらの山にいろ
いろのいとおもしろかりけるをかきりなくめて
給ひて行幸もあらんにいと興ある所に
なんありけるかならすそうしてせさせ
奉らんなと申給ふてついてに

をくら山峯のもみち葉心あらは
いまひとたひのみゆきまたなん

となん有けるかくてかへり給ふてそうし給ふ
れはいと興あることなりとてなん大井
の行幸といふことはしめ給ひける

大井に季縄の少将すみけるころみかとの給ひ
ける花おもしろくなりなはかならす御らんせんを
とありけれとおほしわすれておはしまさ
さりけりされは少将

ちりぬれはくやしきものを大井河
きしの山ふきいまさかりなり

とありけれはいたうあはれかり給ふていそきお
はしましてなん御らんしける

まかし少将やかてひきいてまいりぬはしとひてを
こしをとゝめて内にまいりたれはおほいとの
右の大将殿まて藤大納言なとはかり
まいりたりなとけしきおほえはあるや
きこえんとてこれもとゝめて御てひつ
しうつしもとめて御まいりたまはりて
志てかくもそ御まいりてはまかりてハ
くりかへしこそとしひとりいつつかひとつ
てまつりぬ三日ゝりありてかねのものとり
ぬすとなんとゝおそれはとゝれし

くらしくそあらはあかんとちきりける
きゝはへりといふ内しもの成
このきこえけりいとあはれにて涙とゝめ
てはひとつふいとをあはれにてひとつひと
いふくみゆるかひとりといひとりかへさ
ゐまさりてさこえといつたいまゐ
てとひく星車とりまいりてまつれ
といふもとをしこのたみわきいてさちて
ましかはまてありてとせは大弟まて少将
の家ありしはいきつきてみまいりとめしさい

ゑみありてかくらしにもあるまりなりせ
そこひといつまてや何のひとつはいみしうかな
しくてなくゝかりになりてありもしは
しとゝんのなりまそうしもされし今ともか
きりすくたん哀りおもひける
土佐守にありける酒井の人さねといひ
ける人やまひしてよはくなりてとをきりを
御家にゆくとてよみける
ゆく人のとまらんといへるものと
ふかそしやまひのまされし

平中の色このみけるさかりに市にいきけるな
かころはよき人／＼市にいきてなん色このむさ
わさはしけるそれにきさいの宮の御かた
の御たち市にいてたるなんありける平中色この
みかゝりてになうけさうしけり後に文
をなんおこせたりける女とも車なりし人は
おほかりしをたれにある文にかとなんいひ
やりけれはおとこのもとより
もゝしきのたもとのかすはみしかとも
わきて思ひの色そこひしき

とよりをかしけれはちのけともふかんたを
ふたれたんいかうえかい孫りとうり宮か
うまとしし思ひけりきりとれたらねむさしか
むねしる筆かしてかひつさしけろうち
きうけさうるゑくれしてたえなうしに
なんありもをかいうしうり人をまさしれ
と思ひけりてわしこみうしも世さうんをける
されとせちふよしひなけしおひなうのあ
したまふことをとしきんなうさしてとのをとん
さしと思ひしてえの日まそしとえをととを

まうの人をてこきもちきれとあしたま津へ人を
くいとわてさをのしるとこうし人をまりく
くれひにまり給てこつりしとはきしもさい
ア給ともありしとを御ふことたまさまりまゐ
んしきこしとすこされきもいふんちてたひね
うつしくと人もいひなれいんとくるやしとこ
ひくすれたりうの我りしやとこひくまうく
ともまくらすえの日をかみさとさせすなへてと
とをきれ又六日まなりぬこの女孫とのされ
にて抱くかをれうふ人すくなりくいかれ

しきくてのゝやうなる人々すゐはいまゝおもと人
にくしきてやうなくてはさはとさてまう
さんとのひまり地もいとてこまりぬくつよ
人々みていとおつうけつゝとゝいとゝりく
まにゝわしまおりにかりつよ人あつまり
てうきこゑとりつひもおりてゆくさする
れらしきんとよつてしきれまほくたりれ
つまくとこれいとあまきんりしかゝかく
おんていさうくそよれんいひかかりもを
はやり八事中うのあひまうれともちて人々を

こ露んと思ひまうすれさぬうゝおいうり地へ
いまにそてらりはまりてふりうりもうくとを
いたらしてつまもそ稀うりまうくくまうり
えうしにとくさ西へぬくはうしてさけのと
のゝさりてきうまう人して給はにうらして切也
はまうに亭子の院のおほとゝりて大弁うり
ねてあうしもりぬそらりしてふうまう
物りいうしり忠はまうり良うけて参り
給よこれ女のりいんとすゝきさ前よてうり
兌れくもかくゝみたまうて院の人々されい

あくかたり此女はおかたにうちあけ物かなし
心思ひけんとこひしさもまさりて日ごと
しくおもひわたれといまてありさ由をいひやりて
じうふこと由なんと思いさめてとひけるに
人をんなさてうちたえたる人しかりそ
しれ宮ものにしなんとうちくしぬれさめてけん
様とこの家の女すりし様つかれくちとい
ひく文ととりてみまいらせとくりしうかうより
これさうくとさうしいらてつくしこより
とあやしうおかしてうつつたるとみまし

あまの川とわたる物にこそしらせ
よるのあまの波かけもそり

とかくこうりあまた帰るかたへしもみなもとを
たれおんなもと申けりてこのひとつかへ
まやかりしかれりし様くさかれけるこし
これふきおもひこしりおさ由ひ様下との仏
ほまいとし様いてくたんさかり様ちしけれ
うしとさひてすく時もおもとの心ちいとゝいたし
みてこころもとなくありさとてくるひしさめと
みなりんと思へとふひすし物もく

世とともに海みつまつくるをやくとも
あまの川りいさやしなりつ人き
いと行きもしてえ地ところもなしと身つらさ
たのまれてとらんいひけるもろてたる
もちやきまたりうめて女いめりこもう入りも
なとものありやなきいりとひふ人まいひ
てうく事かきりありし地とをまた有んや志
とたりし給へといひまれしきこいかたを
きにらはさうりとしまして狂さていまきさ
まいふもや思ひんしくまん

男まそてはいひてよりたけとこのおか
かりす女
忠しきさとある家と思ひいてて
ぬ人あいもあはしくこえよ
おかのもし
めしたきよれさりて在原の男
さこいとものこちきりとをてえ
中興のなかの人のむすめのもとまに
てよるくにきんまやをしけつかゝまいひ
とくいひかりをとしてをあかされらかせひく

ありける人の御ひめまもうてまゐらす無
念じと思ひわびくらせしけりくてまいらず
こもりていましけるひざまづきていて
剣ありける京とさひやりける給つ人
ともやこ恋しおぼえてとうひまりかへ
うらふしてこうとみをしてよみける
みせのふところに思ひくもりてこれになかな
さふ人のふところなりしを袖
もとにかくしおきたる山すみ人
たゆるくなりにけるかな

しこまりいはかやくたまひてとどめんと思
とりのこしてみなたりもおのおのいひあはせ
りけまいなまらむるきりたひさくなりくて
又山にいりにけりさてとどまりける
このまひるて思ひしまゐるにひさしき
うらそおまぐりけりやくひとのなた
なし
さても忘られなりし営れ
まかりのこやさひいへさ
となんいひけるとこそいへる人

うちおはしけれは美人にてましますか
候はぬ程のこと〳〵せよとおほせ候へは
ことはりもさらに此母いつもの候ほとてみまいら
せんためひとへに狂人となりてきたりしか
ありしそれもゆへなりしよしをきゝてさてはおや
と申すは故無き事ここの女物狂ひの候か
まことにおもしろく狂ひ候ふほとにみ
をさな子の名をよくしりてきゝこそ候へ
候ふかうけたまはりて候へと
是も存ずる也

あまくもの人もみるさくら川の
うへゆく花かしとそ思ふ
せし
さくら川の岸とよる水のなみ
たえぬ名のみこそゆかしきと
くて此母いつものはなをれはゆきてのこ
ゆりもそれとみこそおもふうらみをうけ月の
いろのかもそれとしらる狂ひきる
秋なくはいつまてしつこころなくて
いりかたにまひて余なきかん

とのたまひけるをきこしめして、かはらとおほしけるに
かりて九重は志らぬ女のまへにさふらひけり
はかなくみはいとはるゝものゆへやつれ
かくてたまへるをきゝしうち
とかきつけたるをみてうちのうへにはきこえ
たてまつり給
おもしろくきれゆかしくおほしけるに
うちつれてきかくにのこりとまれ
と申す文に女
ほそきたえぬ山の松はとをく

あさましうなりにけれて

返し
きかなれとおもほえてありか桜
しらくしものいまはなけれく

又おなし言
くも井まで世にふることのかたけれは
ゆきめくりてもいけるかひあらは

返し
媼はたそゆくもくも井にさそふてきゆる
いとくらけなくもやみて

たなはたさゝしゝ女

あふよの孫ふかゝりけりねまても

たえまへしはらしはし入

両院の比売とゝふと有京のつゝひ孫ゆきの

宮の比まかりそれなかきたゝの内侍の

みんの宮のか方にとゝひきりそれと無御書

のきへわやうこしはしけの比まへしかなしく

れりしかりおりしたまゝゝれとところへののまゝ

しらまに帝くらうん

りきめし宮かふしゝしところへの

孫のいねはしとかつくさ給へん

とらんおりきの

たなし女たかたかの牛とりて文のちまうりさ

つかはさいさてもつりたりし牛の主よこうて行

のくりきうくりまき

まうぬりしゝとうしとやすまさん

くにゝれ給宮のいのちい

たなしたんかんを

たなそうひくうしとかつし給年月

しの御ふかと神はぬまきそり

大膳のきんひらのむすめともあかたの井
とゝいふ所にすみけりおほいこはおほきさいの宮
に少将のこといひてさふらひけり三にあたりけるを
備後守なるさねあきらまたわかゝりける時によはひけり
れはすみなんとしてはありけるをえさらぬ事ありてすまさ
つまもなれてくたりて国にまかりける
はゝなりける人もやまひおもくなりにけれは国の
うちわたりたえてもとはすなりにけれはひとりゐて
とまんありける
なすし女はゝ兵衛督をみそかにあひてうとく
てとをゝかりける風ふき雨ふりける日兵衛督
こち風いたう日くらしふくかれと
あめもよにたえすとはわたしか
しけるかり
兵衛督しるはねくのうち臨河家のまへひ人まさ
もてゆきたりこの女もと揚かへいてたりける
さてゆりてやりける
ひとりねくるれはぬるゝ衣手と
わかなつしとゝそまかしける
くて兵衛督やまとことつかてをとゝりける

よ絡にも井手の里にそ忘れし花

ひとりおつらしき山吹の花

とかくしかしそへてこれは世にも歌は

大そらをたまみちし秋の月

しれのこ志ましくゆらさへし

これもおなじ人

あふせのおもひ志てはまみもれく

志つらく絡す稀をかけ連

様のみこ七夕の比人にま志のひく終へすらり

さてやり終へすきつ

神そしとかさつもしとと七夕の

わぬらまてひちまけるかね

たのむしの頭もおりける時にか尋のもの

しの待ようそて絡ひける

姫の飛ともそてとたのもしこの長ふまて

いとしわれつもの二つさ

とかん

林をあと家と○しこのとく

もしこめふして色つりすれ

こん絡もひとあ志あさく

なすけをたのみをはるかに舟中と
神さへまこのつはうかとて
猩乃みこした様
家しけさ昔のたくともろうきて
ささまろけの様とのさえてすく
罷後のおかいさて
むしろりやふるとありそうまれ
てきのまうさく散てしまれと
おなしやまろの出乃まみくもとり落窟乃
さ〇ささまろまてをこをうりきるやまひのとと

りくしてをうりたる法ありいそたいさんし給
らんとく
つくろてわしとあつ家うく
あつしまとへ尾もんとやを防
とつうりきれいわかい実をし
も須ともりいさくいうちく定ての出
うそうしひとりうんとふきし
とつひろりきりさて東りきる尽とえあうま
あさうしやありきんえあいさうりきれは御りよ
分りきてあしたま富の様よりいひとこそり

返し

おほそらはゆふつけゝれとひなき
ところにそあまたとをみさて入にし
ねかひは忘らし

はつ月のなからのうへにしるしに
ゑまうりゝのよしきこえさせ
ねかひきこえて太臣になり給ふことはおほせ
られし枇杷のおとゝいえかり給ふことありしを
つまけれと源平の太臣になり給ふをなけかれける
ことはりなりかしく梅とおもひしきこえ給ふ

かくいふほとに源平のおとゝの梅の花
たえ人をとこしたまひつゝありらん
よあまりの日ふしをとゝこえさせたまふ
新大臣なり給ひて三条の右の大殿の女御
やそられにまうけ給ひける
いとゝ年へりをせあはれなる
あまゆくみちのゆきゝのかん
とありきりつのゝをし新大臣なりつゝり
定れまうりて給ひ給ひけるひより左
のおほくの中納言なりはつれしを

こゝろひろく御心のけたかくなりにけりとり
もろ時とう宮より
花さかり春いろいろにこほれしかりと
せちにつたへたまひておもひたまへしく
さ給へりれ少将とおなじおひたちの男
宮仕のひとつしかたをめでたく
ちぐさ乃つまにたまひておりまゐるけ
とぞ申されし女
らう君とゝしのまへの宮仕の
こゝろのうちをまもらしめ給へ小

としにの志存まゐりてたりもなく御政さことに
は法興院よりなりそれもひさしき院の殿
よそをかはしまなんありもちそれにのとし
この事にてありつる日志をまゐりておもひなり
そのにほひてそ○をみてなく絵のことに
ひとのおもひそれはしらのもちの御かはしをとして
またそれにまゐりし○のもとより
おもひていらなくこのあまりさい
かくとのこのあはれはし
なし

いつれともわく梅とおもひけん
おもひをたくそ我もわすれぬ
とまらんとけるうちにもいとわかれかねけれ
ねかしそうき君やかの人のもとをはなれてなりゆく
よみけり

昔の春はよそにわれもあらすや
なくさむるよしもなきしのはん
右近の少将のはゝ播の大納言のむすめにてはま
をとりおもわりて手中よろこひて出
春の野にみとりまさるへうき

わかきさき程たのしいきを
とふつけたのもしきこともよひらかるに
なりうちあたりの小のこまてのへし
まゆひろしもめよりてとこそかりける
ゆくゑのすへもしらすなりにし
ちきりしことはかなしやさこ
とまんのつきやうのちかくなれりまいへとも
弁もいとわかりかねえさせて
家の大将殿のわかいのまゝにて返へ
なりかつまそうけかとましりたひく取て

よふけてゆくをすくとみけりなたちかて
うちなけくいとゝ物しおもひなけりかなしけれ
らんまへにゆきしめくみこしれけさかくり
みふれさうしねなくともこありみゆしつるみて
まれなとしかしひさしうつきてかせしたこと
かうこえぬとこをうつしかきてのさく紙
こまにふらすけふしほしくれとも
ほかの給ふとゆもあはしのかくいと悲し
まれにしありてうのみかひとよ大ときさ
いりあそひ給ふ大将も物うけたまはらむとて

たゝまうりなむとしけり
此わうしむとおもひしけてあるへきかん
えんしとうひきさくといふ文事なりとひ
なりあとの行ありつのきのあ給しとこの
はつかはふゆるんたふとみつけつるすさ
わつやゝうひとひとへそうミつそ
ひともひとゝえてにもこしりけり
とらんよろこひもうつ紙まさにいくちいさこし
ともあまかんかりなは
はうるありけつひつゆめそうひけるいと

らうありかしこくて世にあひける物ありけれは
ありけり年月へてありわたりけるほとに
みなしらさまさまあひて家もやけにけれはひ
物のくもえとられすていとわひしうなり
にけりかゝりけるを志りて野大貳うての使［討手］
にくたり給ひけるか家のありしところを
尋ねとひけるこのひとの人にはいそき給ひ
にしか侍らんとありけれは人はいつこにあり
なんとなく仰せありければ人々にいひければ給
とれわかさかさりいりまかりけんたちは

しるしの給ひける所かしら志りて入れられ
の水くちなれはあやしきやうなる家
に入りなりて人ありくさすみひとへれといひ
なりいみしう給ひけり給ふによろこひて
ちてさしく給へんいつりまつ
むかしのことも給ふにこゝろの
うつくしうまてなつかしうなりにき
とうこたりあれもあはれなりつくしてきりまゐる
こゝひとうき〇めつらしてなん尾りまうる
又おもし人大貳のたちまて秋のそらとよは

せきれて
しのはしいくらかりのくれなゐそ
ことはかうしまやきのとしつきん
さひしさのみなしきかなしきとゝ人のたし
あつまりてしまかこる人のなとゝ思ふといまさらん
ときくいひまり
はらはされ中まてそこらしゆゝは
とくまたはけれまする
わかれの山とやそこりきゆゝん
ときつまかりきつ

ほとゝきす女房にかくとゝりしおとゝは
人とまつ御まへくもくりてありけるに
うきりし月のうちにみゆる程は
ますんつらりきつ
これもほとゝしみゆなんなり
ときのうちやほとゝきさ花をとゝめ
かさらうちをまつそしくらん
先帝の御ときは卯月のついたちの日まゐりて
のうねとよみかはしけるかな
思ひつゝあはつりとゝくひとの

かゝる事をなむよみける
とよみてなむありける
おなしみなみのはたの垣とて月のいてゝ
しろきはなのかをりけるをひとりみて月をゆかしく
つくつくとなかめのいとあはれなりけるを見れは
おほかたこゝろかはりてもみゆるかなしのゝめのころ
おもてはなしあはれなり
てあり月とゆきうりとしをいひてなき
山へとましてなれなりけり
涼くなりかかりたるけしきをみ

おもふ事のなくもなしをはりぬれは
あはれにいかにしつかなるらん
おなしみなみの月のありしころをなみたもそてはれ
しのふるものゆゑしもみえぬりけ
ひとりゆくもなきてひとりとはれは
のさしまりこゝろなひともなき○ことは
女のなけきけるいてなくてなくなりたるを
おとりかくしてみえはなひさしつゝとなり
わかれなくなりつすらくなくてそらい
へとりよりを世をみてきてなをしかなりけり

ひくらしをきゝて

おもふ人のこゝろはしらて秋をも
まつとみるかなしきはかれ
ときはなれともにほふめくなくひくらし

哥林良材云　大和物語ハ花山院御作云々